

俺、天龍！フッフ、怖
いか？ってそんなに怖
がらなくても…

きつね。

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

龍田にいじってもらったり、駆逐艦に懐かたくて天龍になったのに、本当に怖がられてしまうTS転生モノ。

目次

1. 理想のために ————— 1
2. さあ、暴れてやるぜ！だから龍田、
弄ってくれよな！ ————— 9
3. 思ったよりめんどくせえぞこの鎮守
府！どうなつてんだ神イ！ ————— 17
4. 大体把握したけどさあ…… ————— 26
5. めんどくさいって言うてんだよ!?

1. 理想のために

「はあ。今回のイベント難しいなあ。E-3から進めんよ」

俺は今回のイベントと格闘していた。そして、E-3にたどり着いたものの、ずっと足踏みしている。

「高速修復剤ももう残り少ないし…また愛しの駆逐艦と、龍田に遠征行ってもらおうか」

『いや、その必要はない』

「は？」

その瞬間、部屋の壁を突き破ってタンクローリーが突っ込んできた。

唐突すぎねえ!?

——

「はい、ようこそ」

「ようこそじゃねえよ」

俺の目の前にいきなり現れたこのおっさんにひとまずキレる。

「だいたいなんだよ、この空間は。俺なぜか突っ込んで来たタンクローリーに轢かれたと思うんだけど？」

「え？なんでそんな不機嫌なの？ほら、ここ最近流行ってる異世界転生モノの最初の場面の神様ゾーンだよ？もつとテンション上がらない？」

「うるせえんだよクソ爺。イベントの途中だったんだぞこちとら？」

ほんと、どうしてくれんの？あのイベントめちやくちや頑張ったのに、台無しじゃねえか、おい。

「えー…。何コイツ？今までの転生者だったらノリノリな上にみんな上機嫌だったのに、ゲームの方優先とか…えー…」

「んだよなんか文句あんのか？」

「いや…ないけどさ…。えー…」

なんだこの爺。勝手にここに呼び出しといてなんなんだよ、マジで。

「はあ…。もう割り切るしかないかのう…。さて、では」

「ではもなにもねえんだよ、さっさと話進める爺」

「本当なんでそんな悪態つくの？儂神だよ？今から転生させてあげるんだよ？」

「これがよくある異世界転生モノ通りなら、俺はお前のミスかなんかで死んだんだろ？なんで自分を殺した奴に悪態つかないと思ってるの？」

ホント、なんでそんな喜ぶのが当たり前みたいなスタンスなんだよ。

普通殺されたら怒るだろうがよ。ましてや俺はまだ龍田や駆逐艦とケツコンできず

に死んでんだよ。不機嫌で当然だろ？」

「いやまあそうなんだけどさ。その通りなんだけどさ。今までの人間達はもつと大喜びしてたのよ。やったー転生だーって。それが君何？転生したくないの？」

「転生させるくらいだったら元の俺の家に戻せカス。それで解決だろ？」

「うわあ。ついにカスとか言つたよこの人間。神に向かつて」

神だとか知るかボケ。さつさとどうにかしろ。

「あのね、神にもルールつてもものがあるのよ、うん。一回死んじやったら元通りにはならないのよね？だから、死なせちやったりした人間には特典を与えて、希望の世界に転生させるのがルールな訳。だから、希望の特典と、行きたい世界選んでくれる？」

「はあ？そんなの知るか。俺の望みは元の姿で元の世界。これだけ」

「だからさあ、出来ないって言つてんだよ。他のにして？ほら！剣と魔法の世界とかどう？」

「興味ない。さつさと元通りにしろ」

だんだんイライラが溜まっていく。今俺の頭の中は、龍田や可愛い駆逐艦たちとケツコンすることで頭がいっぱいーん？待てよ？

俺は一つ閃いたことを聞いてみることにする。

「おい、爺。その転生先つてのはゲームの世界でもいいのか？」

「ん？ 勿論大丈夫じゃけど？」

「おう、だったら欲しい特典と行きたい世界あるぜ」

「ホントか!? ならば早く言うが良い！ この儂が叶えてやろう！」

「まず、『艦これ』の世界で」

「ほうほう」

「希望特典は龍田と駆逐艦にモテモテの有能なイケメン提督になりたい！」

「…」

「あれ？」

何故か神が顔をしかめる。なんかおかしいこと言ったか？

「えっとね、少し聞いて欲しいんだけどね、少し落ち着いて聞いてくれよ？」

「な、なんだよ。何を言う気だ？」

「むりだわ、それw」

「はあああああ!？」

「うわお、うるさっ！」

「えっちよっ、な、なん、なんで!？」

「えっとね、その『モテモテ有能提督』ってジャンルは人気でさあ、もう定員オーバーって言うかなんて言うか」

「定員オーバーって何!？」

なんだそれは。転生で定員オーバーとか初めて聞いたぞオイ。

「さっき神々のルールの話したじゃん？ ルールの中に、〃同じ世界に同じ希望を通しすぎない〃ってゆーのがあってさあ。君の希望のジャンル希望者が多すぎて、世界をインフレさせちゃったんだよねえ。だから、あっちの世界の提督は、大体の確率で転生者なんだよね。元々あっちの世界出身の提督が少なすぎる上に、転生組が有能だから、やらと採用ラインみたいなのが低いから増えないのよ。しかもそろそろ戦争終わりそうだし。深海棲艦のボロ負けで」

え、深海棲艦可哀そ。

「だから、神々はこれ以上、〃有能モテモテ提督〃というジャンルは送らないことに決まってる。だから、他のでよろしくね☆」

「ふざけんなああ!!」

マジでふざけんなよ!これじゃ俺の計画台無しじゃねーか!

「ああ…。終わった…。俺の龍田にイジめられながら駆逐艦に囲まれて暮らすという理想が…」

「さっきも思ったけど、龍田と駆逐艦推しすぎじゃない? Mでロリコンとか最悪じゃないか」

「俺はMでもないし、ロリコンでもない！ドMであり、フェミニストの紳士だ！」
「最悪のレベル上がったけど？」

うるせーよ。なんと言おうと俺はドMでフェミニストの紳士なんだよ。

それより、どうすれば俺の理想は叶うんだ？

「ふむ…それなら、1ついい提案があるぞい？龍田にイジめられつつ駆逐艦に囲まれる方法」

「なんだと!？」

馬鹿な…コイツ天才か!?

「それはのう… 軽巡洋艦 天龍”に転生することじゃ。天龍は駆逐艦に懷かれ、妹の龍田に弄られることができるぞい」

「乗った」

「決断早!？」

そんなもん迷う訳がねえだろ。それしか希望がないなら即乗るわ。

「いいのか？普通性転換とかにはみんな渋るんだけど？」

「龍田に弄ってもらえて、駆逐艦に懷いて貰えるなら、俺は躊躇なんてしない」

「あんな厨二病キャラでも？」

「別にいい」

「あんな周りからも弄られるゲキ弱でも？」

「いや、それはちよつと癪だな。おい爺、転生特典として“強さ”を寄越せ。具体的には、姫級とかと張り合えるくらい」

「え？ちよ」

「なんだよ、それぐらいできるだろ？龍田や駆逐艦を守る為だよ」

「いや、できるけどさあ…」

「だったらやれ。ついでに、出来れば転生したやつが提督じゃない鎮守府がいいぞ」

「いや、それについては新しく“艦これ”の概念の世界を作るからいいんだけどさ…」

「だったら提督に…なんてことは野暮か。そのせいでインフレが起きたんだもんな。ならいいんだよ、早くしろ」

「わ、わかった…では、お主を“艦これ”の世界で“軽巡洋艦 天龍”として、転生させる！尚、“姫級に勝てる戦闘能力”も与えるものとする！」

そうすると、俺は足元から光に包まれる。そして、爺が告げる。

「では、よき転生ライフを」

そして俺は、姫級を倒せる戦闘力を持った、“軽巡洋艦 天龍”として生まれ変わった。のだった。

そして、俺はこの時の判断を呪う事となる事を、まだ知らない。

そして、送り出した神は1人眩く。

「天龍って弱いからこそ駆逐艦と一緒に遠征できて懐かれる訳だし、弱いからこそ龍田にも弄られるのに大丈夫なんかな？」

2. さあ、暴れてやるぜ！だから龍田、弄ってくれよな！

プシュー

ガコン！

俺は、あの神と話してすぐ、意識を失った。クソ論

しかし、今再び意識が煙と何かの機械音で目覚める。

ようやくだろうか。恐らく、この暗闇は建造ドックの中とかだろう。

さあ開いてくれ誰かよ。駆逐艦か龍田だどめちやくちや嬉しいぜ。

ギイイイ

鈍い金属音と共に、光が差し込んで来る。さあ、俺の転生ライフの始まりだ。天龍ならこれだよな？

「俺は天龍型二番艦天龍だ。フッフ、怖いかな？」

決まったぜ！さあ相手さんの反応はどんなもんだ？

「やあ、天龍。私はこの鎮守府の提督だ。早速で悪いが、遠征に行ってもらおう。ではー
は？」

「ちよちよちよつと待てよ！俺に出撃させてくれよ！遠征なんて嫌だよ！なあ！」

俺は少し焦って提督に詰め寄る。ふざけんな。俺は駆逐艦と龍田を守るために特典使ったんだ。遠征じゃ發揮できないだろ。しかもなんだその無反応。

「ふむ、君のスペックでは頼りにならないのだから燃費の良い君を遠征に回そうと思っただけだが、どうなのかね?」

「舐めんよ!俺の装備と戦闘センスは世界水準超えてんだぞ!」

「そうか。そこまで言うのならいいだろう。長門!長門!すぐに入ってこい!」

提督は大声で長門の名を呼ぶ。えらつそーな奴だなー。

「提督、よんだだらうか?」

すると、長門がこの部屋?ってここ工廠か。に入ってくる。

うお、なんか「強者」って感じのオーラしてんなあ。

「この天龍の世界水準を超えた戦闘センスと装備とやらを見てみたくなった。今から彼女と演習だ。準備したまえ」

「んなつ?!彼女のその台詞は一種の冗談セリフみたいなものではないか!何をそんなに本気になつて…!」

カツチーン

あーきちやつたわ。カツチーンと来ちやつたわ。

俺キレると何するかわかんないんだよね。(イキリオタク)

「いいぜ？長門。やってやるよ。その代わり、俺が勝つたらその俺を舐めたような態度と認識を改めやがれ……」

「いいだろう。君がもしも、万が一この長門に勝てたらなんでも君の言うことを聞いてやろう。まあ、私が鍛え上げた自慢の戦艦に、君のような時代遅れの軽巡洋艦が勝てる訳ないがな！」

ブチツ

はい許さん。コロス。誰が時代遅れの軽巡洋艦だ？

コイツ、典型的なクソ提督じゃねえか。

「ほー、いいだろう。じゃあ早くやろうぜ。ボコボコにしてその無駄なプライドへし折ってやつからよお。あん？」

「フン。では、長門とともに、演習場へ行きたまえ」

「ああ。んじゃ長門、案内頼むぜ」

「あつああ」

そして長門共に俺は歩き出す。つたく、なんだアイツは。

「……すまないな、天龍。提督はああいう人なんだ。戦果を挙げて、階級も高く、有能なのは間違いないのだが、いかんせん戦艦や空母を沢山使うために、一部を除いて、軽巡、駆逐艦は全員遠征に回されているのだ。」

だから、少し軽視したような発言が多いのだ。しかし、私も負ける訳にはいかないから。少し本気でいかせてもらおう。「ごちやごちやうるせーな」んなっ!」

さつきから聞いてりや何だこいつは本当にあの戦艦長門か?

「そんな難しいこと考えず、まずは本気でこいよ。そうじやなきや面白くないだろ?この鎮守府の事情はある程度理解した。ようはあの提督がクソつてことだろ?」

「そんな何処ぞの駆逐艦のようなことを…」

「だけど、今はそんな事情は忘れろ。ただ俺と本気で勝負すればいいんだよ。じゃなきやー」

俺は長門に顔をグイッと近づけて、

「死ぬぜ?」

そう吐き捨ててやった。

――

何故だろうか。彼女の言葉は、実力の伴わない冗談の様なものはずなのに。

何故だろうか。スペック的にもそんなことはないとかかっているのに。

何故だろうか。彼女が一言戯言を言った時、本当に死ぬかもしれないと思ったのは。

――

俺は、長門と演習場で向き合っていた。

今から、演習、いや本気の殺り合いが始まる。

『それでは、長門対天龍の演習、開始！』

さて、どーすっかな。

まず大前提として、この体は、耐久力がない。だったら、一発貫つたら演習弾とは言え、大破判定だろう。だから、先ずは—

「行くぞ！天龍！」

そう言つて長門は主砲を発射した。

馬鹿だなあ、なんで言つちやうんだよ。

俺は軽く避ける。そこで、異変に気づく。

砲弾の軌道がわかる。

わかるのだ、手に取るように。長門がどこを狙っているか。何をしようとしているか。手に取るようにわかるのだ。

なるほど、これが転生特典か。火力や装甲をわかりやすいほど上げてしまえば、すぐに異常な艦だとわかられてしまうが、回避能力が高いだけだったら戦闘センスが高いで済ますことができるもんな。

なるほど、俺の口から天龍の台詞ではない、“戦闘センス”と出たのもその影響か。

『ええい、なぜ当たらないのだ!長門、もっとしつかり狙え!』

あのゴミ提督の焦ったような声が聞こえる。ハハッ、ざまーないぜ。

「さて、そろそろこつちも反撃といこーかあ!魚雷発射!」

そう言つて俺は魚雷を三本撃つ。

『馬鹿めが!そんなわかりやすい攻撃に長門が当たるかつ!』

ゴミ提督がまた叫び、長門は魚雷を回避した。

「馬鹿はお前だよ」

俺は眩き、長門へ急接近する。

「なっ!接近戦だど!?!」

『ハハハッ!長門!至近距離でぶちかましてやれ!安心しろ、装甲の差で勝てる!』

「言つたろ?馬鹿はお前だつて」

その瞬間、長門に魚雷が命中した。

見事にかかってくれたな。そして、ペイントが塗られた刀を長門首元へ突きつけ、主

砲をこめかみに突きつける。

「これでどうだ?判定員さん?」

『な、長門、中破…:そして、行動制限判定…:』

「いやいいよ大淀」

そう言つて長門は両手を挙げた。

つかあの判定員さん大淀だったんかい。

「ここから逆転する手立てが思いつかない。私の負けだ」

『なにい!?!』

おーおーあのゴミ提督が驚いてらっしやる。最高かよ、オイ。

「天龍。少しいいだろうか?」

長門が俺に耳打ちをして来た。なにか聞きたいことでもあんのか?

「なんだ?」

「最後の接近する前の魚雷だが、いつ放つた?そしてなぜお前は魚雷を持っている?」

「ああ?んなもん決まってるんだろ。工廠を出るところに置いてあつたから機銃と入れ替え
ておいたんだよ。あと、魚雷を撃つたのは、お前が回避行動を取ろうとした瞬間だ。俺
は三本の魚雷をちよつと角度をずらして撃つたから、少し魚雷を見てから動いたろ?そ
の際に撃つたんだよ」

「なんともまあ無茶苦茶な戦法だが、まあいいだろう。とりあえず、勝負は貴様の勝ち
だ、天龍」

そして俺は笑顔を浮かべ、

「ははっ!当然だろ?なんてつたつて俺の装備と戦闘センスは世界水準を軽く超えてる

「からな!」

キメ台詞を口にするのだった。

——

不思議なやつだ。

誰もが不利と思つたカードを奇想天外な戦い方で覆して見せた。

そして更に、殺気を浮かべたかと思えば、無邪気な子供のような笑顔を浮かべる。

本当に不思議な奴だ。

もしかしたら、彼女は。

この「最強の傀儡艦隊」と呼ばれる鎮守府に新しい風を持ってきてくれるかもしれないと、私は一人、勝手に期待をするのであった。

3. 思ったよりめんどくせえぞこの鎮守府！どうなつてんだ神イ！

「さあ、約束通り勝ったぜゴミ提督。約束は守ってもらおうか？」

「くっ…」

長門との演習を勝利した俺は、執務室でゴミ提督に詰め寄っていた。

勿論、演習開始前にコイツの俺を舐めた様な発言を撤回させ、

『なんでもする』

という発言を守ってもらうためだ。

「さあさあさあ？ 取り敢えず条件通り俺に対する舐めた発言を撤回してもらおうか？」

『私は天龍様の事を侮っておりません。誠に申し訳ありませんでした。』

私は無能で使えないゴミです』

「はい、取り敢えず言ってみ？」

「くっ…誰がそんなことをっ…」

「あつれれ？ 艦娘を率いる提督ともあろう大の男が自分の発言を守れないのかな？」

そんなんでいいのかな？」

すぐさま弱音を潰し、ゴミ提督を煽る。ヤツベ、めつちや楽しい。俺は罵倒される方が好みだけど、たまには罵倒するのもいいかもしれない。

「つくーええい!わかった!」私は天龍様のことをあ、悔っております…、まっ誠に申し訳ありませんでした…」

「ほらほら、お前はどんな存在なんだ?」

「わ…私は…無能で…使えないゴミ…です…」

「よくできました」

一応褒めてあげる。いや〜なんか言わせてるときゾクゾクした。俺は龍田以外にはドSだったりするのもかもしれない。

「こつ、これでいいのだな…?」

「ああ、それでいいぜ。んじや長門、この鎮守府の案内をしてもらっていいか?」

「あつ、ああ。勿論だ。天龍の部屋も案内したいしな」

「ああ、助かるぜ。それと長門、今日はもう夕方だが、執務とかは終わってんのか?」

「ああ、厳密に言えば終わっていないが、出撃報告を受けるだけだから、大丈夫だ。鎮守府を回るついでに出会った艦娘に挨拶しよう」

「おう。わかった。それでいいよな?ゴミ提督?」

「あつああ…」

なんだか煮え切らないと言うか、ハキハキと答えないゴミ提督。ちよつと意地悪してやろうか。

「まつさか新人の艦娘に挨拶や鎮守府案内までさせないほどゴミじゃあねえよな〜？流石にそこまでだったらドン引きだぜ〜」

まあ実際こいつはそうなんだろうが、ここまで煽っておけば何も言つてこないだろう。

「ぐつ、ぐう…わかった、後の仕事は全て私が受け持とう」

「あ、だからと言つてこれから報告に来る艦娘に当たり散らすなよな？」

大の男があまりも情けないぜ？」

「ん…ぎい…」

おーおー悔しがってる悔しがってる。

まあ、こいつがそんなことをするって事ぐらいすぐに予想がついた。

だったら釘を刺しておくのは当たり前前だよなあ？

「んじやいこーぜ、長門。案内をよろしく頼むわ」

「うつつむ、では、行こうか。提督、よろしく頼む」

そう言つて俺たちは執務室を出た。

「まずはどうするんだ？」

「一先ずは、お前の部屋に案内しよう。基本的にうちの鎮守府は同型艦で一部屋だ。だから、お前は龍田と同じ部屋になるな。龍田はかなり前に着任しているから、仲良くしてやってくれ」

「なんだよ、仲良くしてくれって。まずそんな心配いらねえよ。だって姉妹艦で、俺の大切な妹だぜ? そんな親みたいな心配しなくても、仲良くするに決まってんだろ?」

「てゆうかむしろ龍田さん目当てでこの身体と世界に転生したので、仲良くする気しかないぜ。」

「ん? まてよ?」

「なあ、長門。聞いてもいいか?」

「どうした?」

「この鎮守府に着任した天龍は俺で何人目だ?」

ふと気になったことを聞いてみることにした。自分で言うのもなんだが、天龍この身体型は元々出やすい艦種だ。それなのに、着任していないなんてことはなかなかないだろう。現に、俺がやっていた「艦これ」のゲームでは、天龍型の2人はかなりの古参だった。

しかし長門は、

「いや、先程も言った通り、うちの提督は軽巡や駆逐艦を軽視しているからな…天龍が来る前に建造した龍田の性能を見て、

『姉妹艦がこの程度なら、性能もそう変わらんだろう。ならば、他に資材を回した方が効率的だ』

と、言つて建造をしなかつたから、今まで龍田はずっと1人だった。

しかし、今回ちよつと人手が足りなくなつたから、遠征要員として、軽巡洋艦、駆逐艦が出る資材量で建造をした結果、お前が着任したと言う訳だ」

「へー」

長門はいかにも当然のような言い方をしたが、おそらく、何か理由があるのだろう。俺は長門が『人手が足りなくなつたから』と言つたとき、長門の瞳の色が一瞬暗くなつたのを見逃さなかつた。

まあ深く詮索する必要もないのかもしれないけど。

「あら？長門。つて貴女は……」

俺が少し思案をしながら歩いていると、前から長門に似た衣装をしている艦娘がやつてきた。

「おお、陸奥。紹介するよ、今日着任した天龍だ。陸奥、自己紹介をしてくれ」

「長門型二番艦、戦艦陸奥よ。よろしくね？天龍」

「ん？おお。俺は天龍型一番艦、軽巡洋艦天龍だ。よろしく頼むぜ」

「あら？少し呆けていたようだけど、どうしたのかしら？」

「いやー随分とスタイルがいいなと思っただからさ」

流石はドスケベボテイ、歩くテンプテーション、などと渾名が付いていた艦娘だ。めちゃめちやダイナマイトボテイだな。はつきり言うのと、見惚れてました。

「あら？嬉しいこと言ってくれるわね。そういう天龍だつてかなりスタイル抜群じゃない？胸おつきいし」

「はは、陸奥に言われると嬉しいな。だが、お前のが凄すぎて自分のスタイルがいいとは思えねえよ」

正直、自分の身体スタイルなんて微塵も気にしてなかった。だつて自分の身体に興奮してたら変態すぎるだろ。

それに、俺の興奮対象は駆逐艦と龍田が主なので。巨乳で興奮しないわけでもないけど、貧乳派なので。うん。

「ははは、確かに陸奥に言われても説得力はないかもな。そろそろ行くこうか、天龍。陸奥、また後でな」

「ええ、また後で。天龍、これからよろしくね」

「ああ、こつちこそよろしく頼むぜ」

俺たちは陸奥と別れを告げて進む。

「ああそうだ長門、さつきざつとは聞いたが、この鎮守府が今どんな状況か教えてくれ

や。なるべく詳しく」

「そうだな、言っておかねばならないな」

長門は少し表情を暗くして語り始めた。

「まずのこの鎮守府がなんて呼ばれているか教えておこう。ひとよんで、
艦隊だ。他にも、
艦隊」

などとも言われている」

「傀儡？物言わぬ人形？」

「ああ。『支配者』である提督に何も言わず、表情すら浮かばずに戦う我らに恐怖したものがつけた名前だよ。まあその通りではあるから何も言えぬのだがな」

長門は自嘲気味に笑い、続ける。

「不思議なものだ。ある意味昔通りだというのに、今では言葉の意味が大きく違う」

「だがその通りだとも思う。戦争をしていない人間は皆我々の姿を見ると、口々にこう言うんだ。『なんて非道いことを』『女を戦わせるな』と。ならば、お前たちが戦えるのか？ 私たちの代わりに海を守ると言うのか？ 私はいつも思うのだ。
私たちは兵器でいいんじゃないかと」

勿論、仲間たちが出撃から帰ってきた後、辛そうにしている姿を見て何も思わないわけではない。解体に怯えている仲間を見ると私も辛い。

だが、何故だろうか。私たちの存在意義を考えると、その感情こそが邪―

「そこまでだ長門」っ!天龍…!」

「俺は今そんな話はしてねえ。この鎮守府の現状を聞いてんだ。そんな考えても答えのでないような問いを聞きたい訳じゃない」

「すつ、すまない。そうだったな」

「別にいいさ。お前の自問自答の間に出てたワードで大体分かったからな。じゃあな、長門。俺の部屋、そこだろ?」

「ああ、そこだ。今日はゆっくり休むといいさ。明日から働くことになるだろうしな」
「ういうい。了解」

大体この鎮守府の現状は分かった。明日からの仕事で確認することにしよう。まあ、殆ど俺の推測は確定だろうが…

あ、そうだ。

「ああ、言い忘れてた。長門、お前の考えていることは決して間違っちゃいない。けどな、もう一度、もう一度よーく考えてみた方がいいかもな。一回頭空っぽにしてから、さ。そしたら本当に考えたいほうについて考えられるんじゃないか?」

さて、これで長門は大丈夫だろう。

本当はこんなこと想定してなかったが、龍田と駆逐艦による俺のハッピーライフする

ためにこの条件じゃあキツいな。

なんでこんな鎮守府なんだよマジでさあ。頼むよ、神。
はあ。面倒くさいけど、

なんとかするか。

4. 大体把握したけどさあ…

「ふあああ。ねっむ」

翌日。

昨日の夜にある程度の解決策を纏めた後眠りについた俺は喧しい総員起こしに合わせて起きていた。

「結局、龍田は来なかったな」

相部屋だと言うから龍田のことも待つていたのだが、龍田は一向に帰ってこず、寝てしまったのだ。どうしたんだろうか。

いやまあ予想はついてただけどさ。

『天龍。起きているか?』

ドアの向こうから長門の声がする。どうやら俺を訪ねて来てくれたようだ。

「あーい、起きてるよ。朝っぱらからありがとな」

俺は長門に返事をしながらドアを開ける。勿論、制服に着替えて。

「おはよう、天龍。なに、礼には及ばないさ。お前に情けないところを見せたせいで予定を伝えられなかったからな。その償いみたいなものだ」

「おいおい、償いつて大袈裟だな。それで？今日の俺の予定は？」

「ああ、まずは天龍は私に勝ったから出撃組だ。今日は新たに海域を攻略することになってる」

「ふんふん」

「出撃時間はマルロクマルマルだ。今がマルヨンマルマルだから、あと二時間後だな」

「へえ。起きたらすぐ出撃って訳じゃねーのな、意外だぜ」

「いや、それは私たち出撃組だけだ。遠征組は寝る間もなく動いている。提督は性能が高ければ、駆逐艦や軽巡洋艦も出撃させるが、その他は基本的に遠征だ。お前は『特例』だろう」

「んま、そーだろうな。それで？『特例』の俺と一緒に出撃するメンバーは？」

「少し待て。えーとだな…」

長門は持っていたファイルのようなものを開き、ペラペラとページを巡る。

さて、誰と出撃できるかな？駆逐艦がいると嬉しいんだが、この鎮守府の現状じゃ無理そうだな。戦艦とか空母だったら大鳳とか瑞鶴が好きなんだけど…

え？なんでか？貧乳好きだからに決まってるんだろ。

「ああ、あったあった。まず、旗艦が航空戦艦日向。そして随伴艦が重巡那智。軽巡に天龍と、那珂。駆逐艦に白雪と夕立だ」

「おいおい、海域攻略に新人の俺を入れて納得してもらえるメンバーなのか？」

「まあ恐らく、大丈夫だろう。確かに気難しい奴等だが、お前の実力なら文句は言わせないだろう？そしてこのメンバーは提督の指示なのだが、まあお前に対する腹いせのようなものだろう」

「はっ！器の小せえ男だなあいつは。ちよつとからかっただけじゃねえか」

「まあ、うちの提督は艦娘を『自分の思い通りに動く兵器』としか思っていないからな。思い通りに動かないお前が気に入らないんだろう」

「『思い通りに動く兵器』ねえ…：そういうや長門の悩みは解決したのか？」

「ああ、お前の一言のおかげで『本当に』したいことに気づけたよ。」

「礼を言わせてくれ」

「ふーん。それなら良かったぜ。あえてお前の出した答えは聞かねえぞ？」

「それでいいさ。お前はその態度が似合っているからな」

「ハハツ、そいつは光栄な評価だな。んで、正面の扉が食堂か？」

「ん？もう着いていたか。そうだ、此処が食堂だ。今の時間だと皆いると思うから、しっかり挨拶を済ませようと思つてな」

「おおそうか。昨日は結局長門と陸奥にしか会えなかったしな。」

「誰かさんが途中で変なことになったせいだ」

「うっ…それに関しては本当にすまなかった。申し訳なく思っている…」
「オイオイ、そんなマジにとんなよ。ちよつとした冗談じゃねえかよ」

俺は笑い飛ばすようにニカつと笑い、食堂の扉を開ける。

しかし、目の前に飛び込んできた光景は、ある意味予想通りのだった。

死んだ目で少量飯を食べ、表情は何も無い。

発する言葉もなく、ただ黙々と目の前に置かれた朝食を食べ続ける、そんな光景であつた。

「はあ…正直そうであつて欲しくなかつたんだがなあ」

ここまで予想通りだとむしろ清々しい。典型的なブラック鎮守府だ。

本当に絵に描いたようにブラックで草も生えない。

「天龍。予想はついていただろうが、食堂はこんな感じだ。いや、食堂ですらこんな感じだ」

「ああクソ。俺は外れて欲しかったよ、できればさ」

「じゃあ、天龍のことを紹介しようと思う。少しそこで待つてくれ」

そう言つて長門は食堂の真ん中へ歩いて行く。しかし、誰も見向きもせず、黙々と朝食を食べ続けている。

「総員、注目！」

長門が一声かけると、全員少し気怠げに長門の方へ注目する。

しかし、表情は依然として無のままだ。

「えー、知っている者は居るかもしれないが、昨日うちに新しい艦娘が着任した。今この場で挨拶をしてもらおうと思う。こつちへ来てくれ」

長門が俺を呼ぶと、全員の意識がこちらを向いた。

うおつ、怖つ。無表情で大勢見られると、ヤバいんだけど。鳥肌たったわ。

「えーあー。ンツウン！俺は、天龍型一番艦で軽巡洋艦の天龍だ。よろしく！俺の戦闘センスと装備は世界水準超えてるぜ！フフ、怖いかな？」

こんな感じだよな、天龍つて。大丈夫だよな？違和感ないよな？

俺は大きな声で名乗りを上げたものの、他の艦娘たちから反応はなく、ただこちらを見ていただけだ。

「えー、次に天龍の配属のことだが、今日の海域攻略班だ」

ピクツ

長門がそう言った瞬間、艦娘達が少し反応した。

なるほどね。そういうのもあんのかな？まあ後で確かめるかな。

「それでは、私からの話は終わりだ。各自朝食をとり、出撃に備えるように！」

長門がそう言うのと、全員また無表情で朝食をとり始めた。

「おいおい、アクションあつてもこれかよ。随分とまいつてんだな。」

「つか、長門ほんとに心配してんのか？なんか態度に心配の色が見えないんだが。」

「長門が食堂の外に歩いて行こうとするので、俺は追いかけていく。」

「おい、長門。どこ行くんだよ。飯食わねえのか？」

「ん？天龍か。私是要らないさ。携帯食で十分だからな。」

「そう言つて長門は携帯食が入つた小さい箱を俺に見せ、中身を3つ食べた。」

「本当にそんな少量で足りんのか？出撃中に倒れたりすんなよ。」

「心配ないさ。何せこれは軍で開発されたかなり実用的な携帯食で、ふた粒で一食分食」

「べたぐらいいまで腹が膨れる。私は今三粒食べたから、普通に大丈夫さ。」

「それに、この鎮守府では出撃の成果が悪いと飯が食えない。」

「ならば、私の分だけでも食べれない連中に回してやつて欲しいのだ。」

「そつか、それはいいことだな。おい長門、俺にもその携帯食くれよ。」

「ん？どうしてだ？お前の分の朝食はあるぞ？」

「おいおい、食べれない連中に回してやろうと思うのは悪いことか？」

「フツ。いやそんなことはないさ。ほら、手を出せ。」

「そう言つて長門は俺の手に二粒携帯食をくれた。」

「俺はそれを一息に飲み込む。すると、腹が膨れる感覚がした。」

「うわお。本当にこんなちっこい粒で腹が膨れるのね。すごいな、おい」

「そうだな。こればかりは大本営も捨てたものではないと思っている」

「確かにそーさな」

「こればかりはねえ…。なるほどなるほど。」

「やっぱりこの線が現実か。この鎮守府がこうなった理由。」

「なら、この後の出撃で…」

「あーもう！なんでこんな面倒臭え世界線なんだよお！」

5. めんどくさいって言ってんだよ!?

あれから1時間ぐらい経って、俺は出撃ドッグへ集合していた。

そこには、長門から聞いた艦娘達が既に集合していた。

「よし、全員揃ったな。今回、旗艦を努める日向だ。では、今回の作戦を発表しよう」

日向は、今回の作戦を発表し始め、皆目は死んでいるものの、しっかりと聞いているようだった。

「それで、那珂と白雪は…いつも通りに…頼むぞ」

「…了解」

日向は少し苦しそうに告げる。了承する2人も、少し間を開けて返事をした。その様子は、まさに絶望、諦め、そして虚無。特に諦めの感情が強そうだと感じた。

「それで新入りの天龍は…お前はなんだか特異な艦娘だと聞いている。

なんでも、一対一の演習で長門に勝ったんだってな」

日向がそう言った途端、他の艦娘全員が此方に視線を向けてくる。

しかしその表情は何も変わらず、無表情のままだった。

食堂で見たのと同じだな。

「ん、そうだが？そんで提督との賭けに勝ったから海域攻略組になった、それだけだ。別に変な扱いしてくれなくて結構だぜ？」

「そうか。では、私の指示通り動いてもらおう。まあ殆ど司令部からの指示だがな…」

『総員、所定の位置に着いてください。出撃です』

大淀からの出撃指示が入り、全員が位置につく。気を引き締めよう。

『総員、出撃！』

さあ見せてやろうか、俺の戦闘センス。

――

出撃してから少しして、海面を進む俺たちは日向の索敵により敵を見つけた。

「司令部に報告。前方に深海棲艦の姿見ゆ。繰り返す、前方に深海棲艦の姿見ゆ」

『了解。数と艦種を報告せよ』

「戦艦級1 軽巡級2 残りは駆逐艦級の6隻編成。繰り返す、戦艦1、軽巡2、残りは駆逐艦の6隻」

『了解。戦闘開始を許可する』

『了解』

司令部への報告を終えた日向は、通信機から顔を上げ、声を張り上げる。

「総員！戦闘準備！前方の6隻を撃沈せよ！」

「了解！」

そして、戦闘が始まる。

「攻撃だあ！オラオラ！」

俺は目の前の軽巡級に、砲撃をする。口調は荒いかもしれんが、最小限の弾で済むように、角度、タイミングを考えて撃っているため、ゲームのように倒しきれないことなっていない。

すぐに深海棲艦を全滅させ、俺たちは先は進む。

意外なほどすんなり進み、直ぐに最深部に到達した。

だが、何かがおかしい。

俺は艦これの世界観はゲームでしか知らないが、余りにも戦闘が少なすぎる気がしてならない。

まだ一戦だぞ？ボスに辿り着くまでには、もつとー

俺が思案をしていると、索敵をしていた日向が大きな声を上げる。

「前方！大量の敵影あり！総員！戦闘用意！」

ぞわりと。

俺の背筋に悪寒が走る。この感覚の優れた体には分かる。

この先にいるのは、ヤバい奴だ。

瞬間。

上空を黒い影が通り過ぎた。

そして同時に声を俺は上げていた。

「避けるー！」

俺は声を上げると同時に付近に居た駆逐艦2人を引つ張り、回避行動を取った。

数瞬遅れて他の艦も回避行動を取るが、爆発を避けきれず、ダメージを負ってしまっ
た。

「おい！みんな無事か!？」

煙が上がり、隠れてしまった味方の方へ声を掛ける。

その返答は砲弾の音で帰って来た。

ドン！ドン！ドン！

3発の砲の音で上空を通り過ぎた艦載機は墜落した。

見事な対空射撃の腕だ。

「全く。舐めてもらっては困るな。あの程度の攻撃で我々がやられる筈がないだろう」

そう言い、堂々とした立ち姿でこちらを見据える那智。その瞳には、曇りなき自信と誇りの色が見て取れた。食堂の死んだ目をしていた姿とえらい違いだ。

「ああ。お前はこの艦隊を舐めすぎているようだな」

そして日向も続ける。那智と同じように、その瞳には生気が宿っている。

「いや、那珂ちゃんは当たったんだけど…」

そして衣装に若干焦げ目がついているものの、損傷はない那珂。

やはり、不意打ちでの空襲をノーダメージで凌ぐあたり、この艦隊の練度は相当なものだ。

「ほお…いや、すまなかった。たしかに俺はお前らを侮っていたよ」

「ふん。まあ鎮守府での我々の様子を見ていたら仕方ないのかも知れんな」

俺は素直に謝罪を入れると、那智は少し怒ったように言葉を続けた。

「それよりさっさと深部へ進むぞ。また私が瑞雲を飛ばそう。索敵が完了次第進軍だ」

「了解」

そして瑞雲を発艦させてすぐ、日向が声を上げた。

「まずい…この先、敵影確認！艦種は、ヲ級elite二隻！ナ級elite二隻！

リ級が一隻！そして…」

日向は唾を飲み込み、告げる。

「せ…戦艦棲姫が一隻…だ…」

「戦艦棲姫?!」

は?マジかよ!?

初陣にしては重すぎるわあ!!

「くっ、それでも行くしかない。陣形は単縦陣!最大限に警戒をして、まずは厄介な空母から仕留めるぞ!」

「了解!」

まあでも、ちょうどいいな。

この身体で本当に姫を倒せんのか、試してやろーじやないの。

そしてすぐに敵艦隊との距離は近づき、俺の初陣の火蓋は切られた。